
B級映画に死す

水色ペンキ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

B級映画に死す

【Zコード】

N4104E

【作者名】

水色ペンキ

【あらすじ】

晴れて大学を卒業した俺の就職先は、アメリカ映画のデータ修正を取り扱うほんの小さな会社だった。ところがこの映画データ、前年開発された新方式で撮影されていて、取り扱いに危険が伴う曲者揃いだったのだ。いいかげんな上司の下で黙々と作業を行う俺。やがて俺は前々からファンだったマイナー女優の初主演作に行き当たる……。

「ええと、確か中本君だつて。きみ、長生きしたいと思つてゐるのかな」

机の書類に目を落としながら、チーフの志賀さんが穏やかにいった。入社そろそろいきなり物騒な質問である。しかし俺は動じなかつた。新入社員心得その一、最初はジョークで迎えられると思え。「早死にするつもりはありませんが……なにか、危険でもあるんですか？」

はにかみながら尋ねる俺に、志賀さんはふふんと鼻で答える。こゝは新小岩にある小さな映像関連会社の一室だ。ハ名しかいないうタッフの中で、新卒はこの俺だけである。

「去年から始めた割のいい受注があつてさ、今後はうちもそれ中心に回していきたいんだけど、君には専業で担当してもらえないかと思つてるんだ。なんせ、新しいことは若い人のほうが慣れやすいからね」

「はい。私でよろしければ、何でもやります」新入社員心得その二、「挨拶は威勢良く。返事は景気よく。

「俺も一応できるんだけど、どうも年食つときつくてさあ……」「そんな、お若いじゃないですか」

志賀さんはどう見ても三十前だ。軽い茶髪を短く刈つて、ブランド物の小洒落たシャツにコーデュロイのスラックス。少々太り気味なのが玉に瑕だが、わりと爽やかに決まつている。いっぽど枯れきつた人には見えなかつた。口調も軽くて、なんだか就活時代に考えていた社会人のイメージとはちょっと違う人である。

「まあ、やってみればわかるよ。君、大学時代はスポーツやってたんだつて?」

「はい。ラグビーのフランカーを」

「なるほどね。まあ、やってないよりはマシだらうな

これには少しだけカチンときた。ラグビーのフォワードは直接選手がぶつかり合う大変なポジションだ。確かにチームは弱小だったが、俺だって一応スタメンだつたし、体格にも多少の自信はある。だがそんなことを口に出すわけにはいかない。新入社員心得その二、「何でも穏やかに受け流せ。」

「何かその業務に向いている競技とかあるんですか?」

「そうだね、早押しクイズのボタン叩きとかかなあ。判断力と、反応速度が大事」

「早押しクイズ……?」

首をかしげる俺をよそに、チーフは書類をクリアケースにしまい込んで、席の後ろの大きなキャビネットに押し込んだ。ふと見ると、ずらりと並んだクリアケースの中に今しまわれた「2013年4月入社 中本」と並んで、「2012年入社 高橋・大山・千葉・加地」という同じサイズのケースがあつた。あれ、社員八名なのに昨年度入社四名? と思った瞬間、スチールの扉が閉められた。

「どうかした?」志賀さんはあくまでにこやかである。

「いいえ、別に」

去年の人について聞くのはよそう。もしも全員すぐ退職したとかだったら、ちょっと気まずいことになる。新入社員心得その四、藪の中には蛇がいる。

「じゃあ、早速やってみようか。書は急げだ」

チーフに連れていかれたのは、窓のない六畳くらいの部屋だった。「管制室」と呼ぶらしい。奥には小さなドアがあつて、さらに一畳くらいの小部屋があるが、そこにも窓はないようだ。管制室の半分は高校の放送室にあつたようなコントロール・パネルに覆われていて、その脇には黒い金属製のサーバー・ラックが置いてある。スイッチやスライダー類のまばらな場所に押し込むように、四つの液晶ディスプレイと三つのキーボードが無造作に並べられていた。椅子はひとつだけ。ほかにも色々よくわからない機材がそこら中に積み

重ねられていく。「雑然」というコトバを具現化したような部屋だつた。

床をうねるケーブルを跨いで奥の部屋を覗くと、そこにあるのは黒い革製のリラックスチェアひとつだけだ。その脇のホルダーからは、サングラス付きのじつついヘッドセットがぶら下がっている。

「最初に確認。トイレは大丈夫かな」

「トイレですか？ 大丈夫です」

「じゃあ、奥の部屋の椅子に座つて、ヘッドセットを頭につけて。あ、ドアは閉めてね」

椅子に座つて扉を閉めると、中はほとんど真っ暗だった。言われたとおりにヘッドセットを頭にかける。途端にスピーカーから志賀チーフの声が聞こえてきた。

「オーケー。きみの感覚をじつちに接続した。何をするのか説明しよう。まず、君にはこれから眠つてもらい」

「眠るんですか？」

「そう。」ひつちから誘導して眠らせるから、難しいことはないよ。

ホイ

バチンという音が聞こえて、一瞬意識が遠のいた。

「いま君は眠つた。真つ暗だからわからないかもしねないが、もう

夢の中だよ。僕の声は聞こえるよね

え？ 本当にもう眠つたのか？

「……聞こえます」半信半疑で答えた声が、確かに壁に反響しない。

「オーケー、環境データを送るわ

バチンバチンと音が続いて、急に辺りが明るくなつた。突然の刺激に、俺は思わず目を瞑る。急に空気が熱気をもつた。湿度も変わつたようである。恐る恐る目を開くと、俺は自分が広いサバンナの真ん中に放り出されていることに気がついた。黄みがかつた青空に、全周みな地平線。上野の科学博物館で見た3D世界のデモみたいた。

「これは……バーチャル・リアリティですか？」

呆気にとられる俺をよそに、スピーカーからはくすくすいう笑い声が聞こえた。

「そういうこと。面白いだろ。まあ、これはデモだけどね」
このまにやら椅子が消えて、俺は乾いた地面に立っていた。試しに歩くとざらりとした砂の感触がある。ただどういうわけか、足音だけはしなかつた。景色は地平線までぶつ通しの大平原で、写真でしか見たことのない奇妙な木々や丈の高い草むらなどが、見渡す限りあちらこちらに点在している。一本の木の下にキリンが立って、長い首をまっすぐ上に伸ばしていた。

「へえ。凄いですね。本物みたいだ」

「だろう。中にいる君にとつては、実際本物みたいなものだよ。これは一年前にアメリカで開発されたシステムで、落ち目がちのハリウッドを救うための切り札になると期待されているものなんだ。いまたくさん映画が制作されてる。そのデータを修正して、お化粧するのがこの業務なんだよ」

「なるほど」そんな大層な仕事を、こんな小さな会社でやってい るのか。

「試しにそのまま一百メートルほどまっすぐ進んでみてくれ。そう そう、そうだ」

言われるままに歩いていくと、突然目の前に窪地が開けた。その中央には池があつて、焦げ茶色の鹿みたいな動物が十頭くらい集まつて、水を飲んでいるようだ。だが奇妙なことに、その鹿たちは全く動いていなかつた。まるで剥製を見ているように。

「池があるだろう。その縁に沿つて、三十メートルほど反時計回りに歩いてくれ。その藪の中にライオンがいる」

「わかりました。ところでチーフ、これは静止映像なんですか？」

「いや、動画だよ。いまはストップしてるだけ。あとで動かすから、それまで待つて」

「はい」

指示された場所に着くと、確かに大きな雌ライオンが伏せていた。

テレビや写真集で見たまんまの、筋骨隆々とした肉食獣である。動物といえば犬くらいしか間近で見たことのない俺にとつて、こんな獣とおりなしで『対面する』のはなかなかできない経験である。

「猫ちゃんは見つかった？」

「いました。迫力ありますね」

「じゃあ、そのライオンの右肩を見てくれ。ちょっと暗いだろ？」「回り込むと、確かに太陽の陰になつていてる。

「じゃあ今からレフ板を出す。それで日光をそこにはうけてみてくれ」ゴトリという音がして、銀色の反射板が目の前に落ちてきた。一瞬直立してふわりと倒れそうになつたそれを、俺は慌てて手で支える。

「それを掲げて、ライオンの肩を照らして」

「こうですか？」

「もう少し下がって。君が映りこんでしまう そう、そうそう。じゃ、再生するよ」

突然起こつた一陣の風が、草原の上に線を描いて渡りだした。激しい虫の声が地面から沸きあがつて、水辺の鹿のまばらな声がそれに混じつて聞こえてくる。世界が活動を開始した。ライオンの肩胛骨が皮の下でざるりと波打つ。そのあまりの近さとリアリティに、俺はレフ板を取り落としそうになつた。だが雌ライオンは俺を無視して、藪越しにじつと前方を窺つている。

「チーフ、このライオン、危なくはないんですね？」

マイクに向かつて小声で尋ねる俺の耳に、志賀さんの小さな笑い声が響いた。

「大丈夫。それは動画にすぎないからね。凄くリアルだけど、ライオンが君に気づいて襲つてくることはない」

「そうですか……まあ、そりゃそうですね」それを聞いてひと安心だ。

「レフ板しつかり持つて……そつ。ただし注意点はある。ライオンは君に無関心だが、不注意で引っかかる位置に立つたりすると、

怪我をすることがあるから気をつけてね

「え？ どういうことですか？」

「JJの方式の強みはスーパーリアルな映像さ。そこで怪我しても君の肉体は傷つかないけど、肉体はまるで傷ついたかのように反応する。痛みもあるし、気絶することもある。ショック症状で命に関わることもある」

「ちょ、ちょっと待ってくださいよ。どつかの映画でそんなの見たような」

「現実が映画に追いついたってことさ。あ、レフ板もういいよ」

狼狽する俺の面前でライオンが急に深く身を沈め、いきなり鉄砲玉のよう前に前方へ跳躍した。もの凄い力強さだ。危険に気づいた鹿たちが、白い尻を踊らせて一斉に水場から逃げ出そうとする。肉食獣は凄まじい速さで走っていくと、狙った一頭の後ろにつけて、それにぴったり食い下がった。同時に遠くの藪や木陰から、別な雌ライオンが何匹か飛びだしてくる。草原は一瞬で複数オニの鬼ごっこ状態になった。

そこで世界が停止した。

「オーケー、お疲れさん。大体分かつただろう。『デモはそこまでいい。帰つておいで』

視界が急に暗転して、手にしたレフ板の感覚が消えた。気温が下がり、周囲が室内の雰囲気に戻つたのを感じる。ヘッドセットを外してゆっくりと立ち上ると、足元が僅かにふらつくのを意識した。体中にはびっしょり汗をかいしている。あのギラギラする太陽に焼かれたためだ。おもむろにドアを開くと、管制室のライトが目眩しかった。

「どうだった？ 最新映像の迫力は」

「凄いですね。でもさつきの話、冗談でしょう？ 触られたら危険とかなんとか」

「いいや、マジだよ。そこにこの仕事の秘密があるんだ。これは最新技術で撮った最高リアリティの映画で、観客を引き込む質に関し

ては、現時点でこれ以上のものはない。3Dシアターでやる映画よりもさらに臨場感に溢れてる。なんせ寒暖とか臭いまで入ってるからね

「万一触られたりしたら、どうなるんです？」

「……豆腐みたいに切り裂かれる。例えば君がさつきのライオンの前にいたと仮定しよう。ライオンが跳ぶ。そして君に触れる。ライオンの存在はきみの精神にとって真だから、当然君はライオンにのしかかられたように感じるだろう。しかしライオンのほうはあくまでも映像だから、君の体に触れてもなんの抵抗も受けない。豆腐に打ち込んだ大砲の弾みたいに、君の体を破壊してしまうんだよ。平たくいえば、あの世界におけるもっとも柔らかい物体が君、ということになる」

「おっそろしい話ですね、でもそうすると、観客も危険なんじゃないですか？」

「そこは技術的な問題だよ。映画関連のテーマパークだって、撮影用のセットでイベントをやつたりするだろう。あれと同じで、観客の位置をきちんと管理しておけば、基本的に事故は起こらない。映像は毎回同じだから、むしろテーマパークより安全さ」

チーフはニヤリと笑って話し続けた。

「でもね、受注額がでかい。危険手当がつまじ。いいことづくめだよ。今田のあれだつて危険手当が五千円つくんだ。もつとヤバイ映像だったら、規定じや最高三十万までつく。この業務専従になれば、三十歳までには蔵が建つよ」

「ほほほ。でもなんでこいつ仕事をアメリカでやらないんでしょうね」

「訴訟大国だからさ。何かあると向こうじやすぐ裁判になる。その点日本はわりとさばさばしているからね。設備水準は安定してるし、契約も納期もきっちり守る。逆エンジニアリングされてパクリを売られるリスクもない。細かい作業に対するこだわりもあるし、賃金面を除いたら、日本が最適なのさ、こいつ仕事をつて」

「なるほど……」

確かにおいしそうな仕事だった。色々危険があるとはいっても、再生と停止はコントロールできるようだし、慎重にやれば大丈夫そう……に、思える。

「どうだい。これ続けてみる？ 本格的にやるなら誓約書を書いて貰わないといけないから、業務といえども強制はできなくてさ」

五秒ほど考えたが、すぐに肚は決まった。

「はい、やらせてください」俺は最高のスマイルで答えた。

それから俺は週に十五回のペースで映画の世界に潜りこむことになつた。聞くところによると普通の映像データとは違つて、この方式では外部から直接映像データに修正をかけることができないらしい。要するに筆でちょっと色合いを直すようには取り繕うことができない。そこで誰かが映画の世界に潜りこんで、何かを布で隠したり、ライトを当てたりして新しい状況を作り出す。それを再度撮影して元のデータと置き換える。この繰り返しで、映画の「お化粧」をするわけだ。ただしijれるのは光だけ。映像世界の物体には、かなり小さなものでも無限の慣性質量があつた。つまり俺が押したり引いたりしても、映像の中の事物は決して動かないのだ。ただし空気中の埃などに打たれて怪我することはなかつたので、物体として扱われるものとそうでないものとの区別はあるらしかつた。ほかにも色々制約があつた。例えば逆再生ができない。早送りもできない。できるのはあくまでも再生と停止だけ。このため修正に先立て通して予習しておくといふことが難しかつた。時間がかかりすぎるからだ。普ながらの映画であれば早送りで全体を把握するのは難しくなかつたのだが、この新しい方式でそれをやると、さすがに業務のオーバーヘッドが大きすぎる。いきおい先方から添付してきたインフォメーションシート頼みとなり、そこに記載された修正箇所を追っかけるだけで精一杯となる。

その日も三つの修正予定があった。オペレーターはいつも通り志賀チーフで、潜る対象は「素敵な午後のスプラッター」「さよなら禁酒法」「キャットファイト工業大学」の三本立てだ。どれもB級臭いタイトルである。

「今日の作品は微妙だね。まあ三つ目に期待しておいてよ。なんでも冴えない工大生の群れが、女性型ロボットによるロボコン相撲大会をする映画らしいよ」チーフの声は踊っていたが、俺の心はむしろ沈んだ。あからさまに退屈そうだ。しかしぬ一句が俺を不死鳥のように蘇らせた。

「主演女優はジェーン・マキャベリン……って誰かな」

「ジョーン・マキャベリン！ あの大女優が出てる！」「存じだろうか。ブロードウェイ出身で2011年度全米金髪美女ランキング七位、2012年度テキサスがもっとも似合う女優一位、「メジヤーリー」はもう見ない」でヒロインを射殺する魔女役、レイズィ・コメディアン・ショーでネタにされた回数最多、当年とつて二十一歳の、要するに冒険的先物買いファンに大人気の女優である。彼女の初主演作品ならば、ファンとしては必見だ。しかも公開前で、しかもしかも好きなアングルから好きなだけ見ることができる……俺はガゼンやる気が出てきた。

「チーフ、今日はさくさくやりましょう」そして最後だけゆっくりやりましょう。

「おう、その心意氣で頼むよ」

最初の作品はひどいものだった。イブニング・ティーを飲むと殺人鬼に変貌するお嬢様が主役で、一秒ごとにワインクをしながら家人を殺しまくるのである。それもスコップで。一体どういう人間が企画を通したのか見当もつかなかつた。また奇妙なことに、この作品には修正箇所がほとんどなかつた。ともかく俺はレフ板を持つてイングリッシュ・ガーデンを走り回り、一二三の修正を行いつつ生け垣の陰からスポーツ映画に近い惨殺シーンを眺め、この時間が過ぎ

てゆくのをおとなしく待つた。そしてラストシーンがやつてきた。

それはビッグ・ベンらしき時計塔の内部で神父とお嬢様が戦うシーンだった。ロンドンのど真ん中でなおスコップを振り回すお嬢様もお嬢様だが、十字架ひとつでそれと戦う神父も神父だ。巨大な歯車がギリギリと回るのもお約束である。歯車とスコップがぶつかり合うときの激しい火花が、線香花火のように暗い機械室の床に舞い散った。やがて神父がお嬢に突き飛ばされて壁の一角にもたれかかると、どういう仕組みかしらないが、時計の巨大な文字盤がぱかりと開いて、外部の光が機械室に差し込んだ。そして俺はあっと声をあげた。それまで暗くてわからなかつたが、部屋の角あたりに予期せぬ人物が隠れていたのだ。それはレフ板を持つた日本人っぽい青年だった。ここで映画が停止した。

「チーフ、この人は？」思わずマイク越しに尋ねる。

「ふふふ。彼は大山君といつてね、君の前任者だよ。去年の暮れから君の入社直前までこの業務をやってたんだが、このシーンでミスつて自分の姿がデータに映りこんでしまったんだな。彼をちょっと隠してほしい。ほら」

ばさりと音がして、俺の前に分厚い暗幕が落ちてきた。

「それを彼に被せておいて」

「はあ」

俺は大山先輩に歩み寄った。社内で一度も見かけたことのない顔だ。両手にレフ板を掲げたその姿は、よくできた蠍人形のように不気味だった。ぽかんと開いた口が間抜けで、視線はお嬢様の体の上のどこかに落ちているらしい。だが詮索はしなかつた。男のマナーである。

「チーフ、この方ってまだ社内にいらっしゃいます？」

「ん？　いないよ」

「辞められたんですか？」

「んー、殉職、した」そつけない答えだ。

「殉職？　何があつたんです？」俺が聞き返すと、チーフは困った

ようには嘆息した。

「ちょっとした事故だよ。シーンが切り替わってすぐに、高層ビルが倒れてくる作品があつてさ。それを忘れて再生してたら、いきなりドシャンや」

それってチーフのミスじゃないのか。

「あれから危なそうなやつは予習するようにしてるし、君は大丈夫だよ。安全、安全」

チーフの笑い声はまるで他人事のようだ。俺ははじめてこの仕事に不安を覚えた。

映画のほうはまもなく終わった。お嬢が塔から神父を突き落として、興奮のあまり一秒ごとに激しくウインクするという馬鹿げたラストだった。この映画を劇場で見る必要はなさそうだ。次は「さよなら禁酒法」である。

「おめでとう。次のやつは手当十五万だよ」

休憩所でコーヒーを啜りながら志賀チーフが言った。これまでに扱った数十作品の中では最高額が三万円程度だったから、これは別格といつていい高さだ。

「そんなヤバイ作品なんですか？」

「うーん、手当の額は危険度以外に、受注規模にも左右されるからね。これは結構大がかりな映画だし、丁寧にやれよって意味合いか大きいと思うよ」

「なるほど。そういうえば、手当って誰が決めるんです？」

「んー、社長と、俺」

お前か。

「じゃあ、今回は単に美味しくてラッキーな仕事ってことですか

「それがそうとも言えないんだ」

どっちだよ。

「チーフ、危険なら危険つておっしゃつてくださいよ。潜るのは俺なんです」

「うーん、そうだねえ」

煮え切らない人だ。ヤバめだったら心の準備が要るし、いい加減な気持ちでは潜りたくない。

「中本君。この仕事で一番リスクが大きいジャンルはなんだと思う？」

「ジャンルですか？……戦争ものですかね」

「そう。それがダントツ。次にギヤングもの、その次がSFってとこだな。なんでかはわかる？」

「銃ですか？」

「あたり。銃弾と爆風はね、コマ送りにしても避けられないんだ。今ここにあつたと思つたら、次の瞬間にはむこうにある、それくらいスピードが早いからね」

何十作も処理させてから、そんなことを言つものだらうか。

「でも、映画の銃とかつて一セモノでしょう？」

「君ねえ、まだまだ認識が甘いな。撮影者にとつては一セモノでも、観客にとつてはリアル。それがこの映画つてもんじやないか。とくにこの新方式では顕著だ。役者が撃つてるのはイミテーション銃だけど、君にとつては実銃と同じ効果があるのさ。だから射線に入るとお陀仏つてわけ。コマ送りの間の部分も、勝手に補完されて君に影響を与える」

「……次のやつ、銃撃戦のシーン、あります？」

「ある」

俺は考え込んでしまった。

「君がこの仕事に慣れるまで、危険なものは意図的に避けてたんだ。でもそろそろ始めてもいい頃かなって思う。不安だつたら符丁を決めておこうか。適当な合い言葉で、君がこれを言つたら必ず再生を止める、これを言つたら再開するみたいな感じで。そうすればちょっと安心だろ？」

「そうですね」

「何がいい？」

「じゃあ……止めるときは『ストップ』、再開するときは『スタート』で」

「味気ないなあ。もつと楽しくやるわよ。停止が『ムービング娘。』で再開が『よっしゃ来いソーラン』とか、さ」

「それはあなたの趣味だろう。いや、待てよ。

「それだったら、停止は『ストップ』のままで、再開を『ジョン』にしてください。ジョン・マキャベリンのジョン」

「あはは。君、彼女がそんなに好きなんだ」

「ずっと前からブレイク待ちなんですよ。今日の三本目が傑作だった、ファンとしてもちょっと鼻が高いですからね」

「なるほどね。じゃあ、ちやつちやとこれを終わらせて、君のジョンに会いにいこうか」

「お願いします」

「さよなら禁酒法」の舞台はレトロな二十年代のニューヨークだった。密造酒の販売を手がけるマフィア組織と「裏の裏」の世界で暗躍する主人公ら雇われ強盗たちとの激しい争い、そして主人公を堅気と信じるヒロインの成長物語である。古典的だが、それだけにアメリカ人の心の琴線をくすぐりそうなストーリーだ。主演もパウロ・セヴェリー、ナサニエル・セドラー、アナスタシア・シェドルマンなど準一流を使っている。準一流というのは要するに、俺の興味を引かない程度にメジャーな俳優ということだ。そしてこの映画の最大の特徴は、全シーンがセピア色で撮られているということだった。なんという徹底した懐古趣味だらう。

「まず、それに着替えておいて」

映画の世界に入り込むと、志賀さんは俺に土色のスースを出してよこした。

「こういつ作品ではね、再撮影部分の外でもフルカラーの人間を混ぜないほうがいいんだ。どうしても散乱光が混じりこんでしまうからね。顔や手なんかは仕方ないけど、せめて服装くらいは映画に合

わせておこへ」「

濃い黄土色のスカーフを巻き、やたらと重い皮のベルトを締める
と、俺はまるつきり禁酒法時代のアメリカ男になってしまった。

「ようし、始めようか」

映画の世界が動き出した。石畳を敷いた通りの両側に、古風な石
造りのアパートメントが建ち並んでいる。真つ昼間なのに人通りは
全然なかつた。目立つものといえば、一二十メートルほど先の建物の
前に停めてある一頭だけの馬車だけだ。

と、突然その建物から一人の男が駆け出して、停めてあつた馬車
に飛び乗つた。馬に鞭があたり、こちらに向かつて走り出す。

「ストップ」

世界が止まつた。

「チーフ、いまデータの置き換えやつてます？ 馬車の近くにいる
んですけど、隠れないと映りこんじやいますかね」

「いや、いまは流してる。そこにいてもいいよ」

「了解。ジェーン」

再び世界が動き出す。そして俺が道端に馬車を避けたちょうど
のとき、先ほどの建物の一階で大爆発が起つた。

凄まじい轟音が街路に響いて、胃を握りつぶすような強烈な振動
が俺の体を揺さぶつた。ガラスが吹き飛び、窓から勢いよく黒煙が
吐き出される。向かいの家々の窓ガラスが粉々になつて地面上に落ち
た。馬車を引く馬がいなないて、後ろの足で立ち上がらんばかりに
暴れだす。御者が動搖する馬に何事か叫び、前足が降りた瞬間を見
計らつてパシリと鞭をくれると、なんとか馬のコントロールを取り
戻して走り去つた。不吉そうな煙の塊が、巨大な丸パンのように膨
張しながら空へと昇つていく。

ふう。これは激しい映画だ。気をつけてないとばっちらを食う
ぞ……。

映画は中々面白かった。定番のバーでの格闘、モツサモサのドレ
スを着たヒロインと主人公との一時的な邂逅、密造酒運搬車の襲撃、

レトロな機関銃と拳銃による銃撃戦、主人公の負傷……。危険なシーンでは人物の近くに寄れないため、細かく一時停止を挟みながらレフ板を置いて待避する。それなりに息のあつたチーフと俺は、つがなくこの映画の修正を進めていった。憧れのジョーンはもうすぐだ。気がつけば物語も終盤となつて、残り少ない時間で何が起ころか興味をくすぐる頃合いになつた。主人公は殺しと略奪の日々に飽いて、バスの死とともにギャングの雇われを引退し、ヒロインを伴つて西部に行く。ありきたりだが、感動的だ。

ラストは駅のシーンだつた。映画の中でしか見たことのない煙突の小さな蒸気機関車が、盛んに白煙を吐き出している。山高帽をかぶつたパウロ・セヴェリーーと日傘を差したアナスタシア・シェドルマンが、大きな旅行鞄を抱えて客車のひとつに乗り込んでいく。俺はスリのようにそのあとに続いた。

列車の中は狭かつた。ステップを昇つて車内に入ると、そこは小さなデッキになつていた。デッキと客席との間にはもう一枚のドアがある。幸運にもそのドアは開け放たれていた。俺はステップをかけて車内の様子を確認する。死角が多いので、先に人の配置を確認しておかなければ危険なのだ。

「チーフ、この映画つて、この一人が旅に出てハッピー・エンドなんですかね」

「んー、インフォメーションシートではそうなつてるね。あ、いや、『旅に出る……』ってなつてるな」

「何ですか、その『旅に出る』のうしろのマは」

「さあ。旅に出てこの街での物語は終わるとか、旅に出るけど不幸になるとか、そういう含みなんじゃないの」

「なるほど。多分公開用の粗筋なんでしょうね。こちどりお客さんじゃないんですから、もう少し詳しいものを寄越してもよさそうなものなのに」

「どうよしなやりとりをして、「ジョーン」となつた。もう感動のラストシーンだ。汽笛が鳴つて、全てのドアが閉められる。機関

車の出力が上昇するブルンという大きな振動が、ここまで車内を伝わってきた。俺はパウロとアナスタシアの隣のボックス席に腰を降ろし、二人が談笑しながら窓の外を眺めているのをぼんやりと見やる。さて、次の映画のことでも考えるか。

列車がずるずると動き始めた。と同時にアナスタシアが悲鳴をあげた。俺は何事かと背を伸ばし、主人公らの肩越しにプラットフォームをすかし見る。一人の女性が列車に向かって駆け寄つてくるのが見えた。口元をスカーフで深々と覆い、着ているものは質の悪い部屋着のような服だ。パウロが慌てて立ち上がり、何事か叫んで窓を降ろそうとした。その頭から山高帽が落ちて、ころころとこちらへ転がつてくる。それと同時に、プラットフォームの女が右手を大きく振りかぶった。

「ストップ！」

世界が止まる。とりあえず山高帽が危険だった。転がつたまま俺の足にあたるうものなら、丸ノコのように俺の爪先を切り落としてしまうだろう。俺はそつとボックス席を抜け出して、別な場所に待避しようとした。だがその瞬間、俺は恐ろしいものを目にして硬直した。

パウロが閉めようとした窓の隙間から、ひとつ黒い物体が、これも映画でしか見たことのないコケシのような物体が、車内に投げ込まれているのを見たのだ。手榴弾だった。

「チーフ、チーフ、やばいっす。とりあえず列車から出ます

「どうしたの？」

「シリリューダンです。列車ン中投げ込まれてます。とりあえず再開は待つてください」

「なるほど。この映画そういうオチだったのか。了解、待機します」

俺は急いで客室の前後を確認した。デッキへのドアはどちらも閉まつていて、俺には開けることができない。手榴弾が投げ込まれた窓も、すでに二十センチ程しか隙間がなかつた。他のボックス席を確認する。しかし主人公らの窓を際だたせるためなのか、大きく開

けられた窓はにわかには見あたらなかつた。こうこうとうとうハリウッドは徹底している。ここも駄目、ここも無理……。と、ようやく通れそうな窓をひとつ発見した。俺はその席に座っている中年女性の膝の上に這い昇ると、歯磨きチューブを絞つたように窓から体をひねり出す。危うく頭から落ちかけたが、なんとか無事に外に出ることができた。危機一髪だ。

「大丈夫？ 外、出れた？」

「何とかOKです。これから駅舎のほうに待避します。もう少し待つてください」

「了解、逃げたら言ってね」

とはいつたものの、俺はラストシーンに現れた最後の登場人物がちょっと気になつた。主人公に殺されたギャングの情婦とか、そういう設定なのだろうか。何にせよ、この映画をアンハッピーエンドに終わらせるための最後の大仕掛けを担つてている人物なわけだ。

俺はその女に歩み寄つた。列車の窓から三メートルとは離れていない。彼女は手榴弾を投げた動作をまだ完全には終えておらず、体をふたつに折つて右手を大きく振り下ろし、逆の手を振り上げてうまくバランスを取つていた。その左手は別の手榴弾を一本握つている。そして激しいアクションのためか、口元のスカーフが半分ばかりずり落ちていた。俺は身を屈めてその顔を覗き込んだ。

「ジェーン！ 出演してたのか！」

そう、それはまさしくジェーン・マキャベリンその人の顔だつた。B級映画のプリンセス、2009年度全米もつともデートをしたい女の子二十九位、悪女を演らしたらマリアン・ロドリゲスの次に憎たらしい女優、TVシリーズ「ランペイジング・ヤングブラッド」三週打ち切りの主犯格……そう、俺のスイートハートだ。ジェーン。含い言葉の君……つて、あれ？

「OK、じゃあ再開するね」

陽気な声が聞こえた。

そして。

轟音がして。

そして。

派手に吹き飛んだ列車の脇で、ジェーンの手榴弾が誘爆して。

そして。

俺の世界も弾けて。

あとは

。

なんだつたらう。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4104e/>

B級映画に死す

2010年10月8日15時15分発行